# 美作国分寺跡

塔跡発掘調査報告書

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第72集

２００２

津山市教育委員会

美作国分寺跡周辺遠景（真上から）

塔跡全景

犬走り・雨落溝（西から）

雨落溝南東隅（北西から）

# 序

津山市は古代より美作国に属しております。美作国ができましたのは、和銅６（７１３）年の事で、備前国から分国いたしました。美作国の役所（国府）跡は津山市総社、また国分寺跡は津山市国分寺に存在する事が知られており、特に国分寺跡につきましては昭和51年からの確認調査で、およそ２町四方の寺域や講堂、金堂、中門、南門が一直線に並ぶ建物の伽藍配置が判明し、瓦などの遺物も多数出土しております。今回の調査は、これら建物の中で位置しか判明していなかった塔について、その規模や構造について確認する事を目的としておりました。今回の調査では基壇規模や外側に犬走りや雨落溝が存在することが判明し、歴史的に貴重な資料を得ることができました。特に犬走りや雨落溝は良好に残っており、当時の様子を伺い知る事ができます。今回の調査結果が、美作地方の古代史研究の一助となれば幸いです。

また、美作国分寺跡一帯が地権者の皆様のご理解と、ご協力により現状において保存されております事は、文化財保護の立場から言えばこの上ないことであり、ひとえに皆様方のご理解の賜物であると受け止めております。

尚、最後になりましたが発掘調査から報告書作成に至るまで、お世話になりました地権者の皆様、発掘調査に従事していただいた皆様、並びに関係各位に対し心より厚く御礼申し上げます。

平成１４年３月３１日

津山市教育委員会

教育長　松　尾　康　義

# 目　次

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡
1．遺跡の立地
2．周辺の遺跡
Ⅱ．過去の調査概要
Ⅲ．調査の経過
1．調査に至る経過
2．調査の経過
3．調査体制
Ⅳ．調査の概要
1．遺構（塔跡）
（1）層序
（2）基壇
（3）犬走り・雨落溝
（4）その他の遺構
2．遺物
（1）瓦・塼
（2）土器
（3）その他
（4）遺構に伴わない遺物
Ⅴ．まとめ
1．基壇の規模と構造について
2．塔建立の時期について

# 例　言

1．本書は美作国分寺塔跡（岡山県津山市国分寺４９７－１番地他）の確認調査報告書である。
1．発掘調査は国庫補助事業として、平成12年度に津山市教育委員会が実施した。
1．発掘調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター小郷利幸、平岡正宏、豊島雪絵が担当した。
1．本書の執筆はⅠ～Ⅳ－１を小郷、Ⅳ－２、Ⅴを平岡が担当し、編集は平岡がおこなった。
1．本書に用いたレベル高は海抜高で、方位は平面直角座標系第Ⅴ系の北である。また、実測図に注記した座標はＸ・Ｙ軸いずれも－で、Ｘ軸は上３桁、Ｙ軸は上２桁をそれぞれ省略した。例えばＸ軸750は－105．750．00を示し、Ｙ軸360は－26．360．00を示す。単位はｍである。
1．本書第１図に使用した「美作国分寺跡周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行２万５千分の１（津山東部）地形図を複製したものである。
1．出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（津山市沼６００・１番地）に保管している。
　尚、本書のデータは、ＰＤＦフォーマットで保管している。

## 挿 図 目 次


第１図　美作国分寺跡周辺主要遺跡分布図
第２図　美作国分寺跡が伽藍配置及びトレンチ配置図
第３図　トレンチ37・38平面・断面図
第４図　トレンチ39・40・42平面・断面図
第５図　トレンチ41平面・断面図
第６図　塔調査区平面図
第７図　トレンチ43・44土層図
第８図　基壇化粧平面・立面図
第９図　雨落溝内瓦出土状況
第10図　軒丸瓦実測図（Ｓ＝１：４）
第11図　軒平瓦実測図（Ｓ＝１：４）
第12図　丸瓦・平瓦実測図（１）（Ｓ＝1:6）
第13図　平瓦・鬼瓦・実測図（１）（Ｓ＝1:6）
第14図　青銅製品実測図（Ｓ＝1:4）
第15図　遺構に伴わない遺物（Ｓ＝1:4）
第16図　塔跡基壇規模復元模式図


## 図 版 目 次


巻頭図版１－１　美作国分寺跡周辺遠景（真上から）
　　２　塔跡全景
　２－１　犬走り・雨落溝（西から）
　　２　雨落溝南東隅（北西から）
図版１－１　美作国分寺跡周辺遠景（南から）
　２　〃　（西から）
　３　〃　（北西から）
　２－１　〃　（北から）
　２　〃　（真上から）
　３　Ｔ43調査前
　３－１　塔調査区全景
　２　Ｔ43犬走り・雨落溝（西から）
　３　〃　（南から）
　４－１　〃　（東から）
　２　雨落溝南東隅
　５－１　基　壇（西から）
　２　〃　（南西から）
　３　〃　（北から）
　６－１　基壇化粧（南東から）
　２　遺物出土状況
　３　近世遺構
　７－１　Ｔ44・45全景
　２　Ｔ44調査前
　３　Ｔ44全景
　８－１　Ｔ45調査風景
　２　Ｔ45全景
　９－１　文化庁坂井秀弥文化財調査官視察
　２　現地説明会
　３　河辺小学校６年生見学
　10　出土遺物（１）
　11　出土遺物（２）

# Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡

## １．遺跡の立地

岡山県の北東部に位置する津山市を地理的に見ると、標高 900 ～ 1300 m級の山並みが連なる中国山地と標高 300 ～ 600 mの吉備高原との間の盆地に位置し、東西 16 ㎞、南北 19 ㎞、面積 186k ㎡で、その内約 54％は山林原野が占めている。平地は主に標高 100 ～ 110 m前後で、市内の最高峰は加茂町境にある天狗寺山（832 m）である。中国山地を源とする吉井川は、西方から市内中心部で加茂川と合流すると大きく蛇行して流路を南にとる。この合流地点で大きくカーブするのは、国分寺の西に位置する日上地域が標高 100 ～ 120 m前後の河岸段丘状となって出っ張っているためである。おそらく当時の川の流れも多少の変化はあっても、現在とあまり変わっていないであろうから、当時の交通手段である河川や陸路を考えると、この辺りが交通の要所であった事は想像に難くない。

歴史的には和銅６（713）年に備前国の６郡（英多・勝田・苫田・久米・大庭・真嶋）を分割して、美作国が置かれる。これまでの調査で美作国の国府は苫田郡内の津山市総社、国分寺は勝田郡内の津山市国分寺周辺につくられた。美作国分寺は加茂川との合流地点から東へ 1.5 ｋｍの標高 105 ～ 108 ｍあたりの平地に造られている。古くから瓦の出土が知られ、「大門」「中塔」などの小字名がある事から国分寺の存在が指摘されており、昭和 51 ～ 54 年度の確認調査から寺域はほぼ方２町で建物の伽藍配置もある程度解明されている。また寺域の東端背後には観音山の丘陵端がせまっており、現在はこの山寄せに天台宗龍寿山国分寺が存在する。この境内には周辺から集められた礎石と考えられる石が数個置かれ、その中には柱座や地覆座を造り出したものや、その大きさから塔の心礎と思われるものもある。

## ２．周辺の遺跡（第１図）

美作国分寺跡周辺は地理的にみても河川が交わる地域で交通の要所と考えられる。特に弥生時代以降の遺跡が数多く存在する地域である。時代別に概観すると、天神原遺跡（註１）と前レ塚遺跡（註２）からナイフ形石器が単独で出土している。縄文時代の遺跡は、クズレ塚古墳の下層（註３）から早期から前期頃の縄文土器と焼けた礫群、西吉田北遺跡（註４）では早・前・晩期の縄文土器片が出土しているぐらいで、遺跡数も少なく明確な遺構は知られていない。

弥生時代では前期の遺跡として、天神原遺跡（註１）が知られているが、断片的な資料が多く遺構そのものは少ない。その後、中期後半以降になると集落遺跡が増加する。中期後半からの集落遺跡では西吉田遺跡（註５）、金井別所遺跡（註６）、一貫西遺跡（註７）などがあり、後期では大畑遺跡（註８）、小原遺跡（註９）、一貫東遺跡（註 10）などがあり、いずれも丘陵上に存在する。その中で墳墓群は、一貫東遺跡で木棺墓や土器棺が検出されているぐらいであるが、基本的に集落と墳墓は同一丘陵上には存在しないようである。

古墳時代では前期古墳として、日上天王山古墳（註 11）があり、全長 56.9 mの前方後円墳で、４基の埋葬施設があり、鏡や鉄器が出土している。中期頃の大形円墳として飯塚古墳（註 12）や橋本塚１号墳（註 13）があり、後者は直径 30 m、２段築成で葺石がめぐり埴輪を伴う。また、帆立貝の形をした井口車塚古墳（註 14）は周溝を伴い円筒埴輪の他に盾や家などの形象埴輪が出土している。中期から後期の古墳群では日上畝山古墳群（註 15）があり、前方後円墳と円墳で構成されるが、現存するのは円墳約 60 基程である。その他、前方後円墳と円墳で構成される茶山古墳群（註 16）、円墳の長畝山

1　美作国分寺跡
2　美作国分尼寺跡
3　一貫東遺跡
4　一貫西遺跡
5　深田河内遺跡
6　別所谷遺跡
7　金井別所遺跡
8　崩レ塚古墳群
9　クズレ塚古墳
10　崩レ塚遺跡
11　柳谷古墳
12　柳谷窯跡
13　小原遺跡
14　大畑遺跡
15　茶山古墳群
16　西吉田遺跡
17　西吉田北遺跡
18　長畝山北古墳群
19　長畝山古墳群
20　河辺小学校裏古墳群
21　日上和田古墳
22　日上天王山古墳
23　日上畝山古墳群
24　日上小深田遺跡
25　飯塚古墳
26　河原田遺跡
27　河辺上原遺跡
28　井口車塚古墳
29　天神原遺跡
30　押入兼田遺跡
31　能満寺古墳群
32　橋本塚古墳群
33　狐塚遺跡
34　兼田丸山古墳
35　玉淋大塚古墳
36　川崎六ツ塚古墳群
37　押入西遺跡

第１図　美作国分寺跡周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝１：25,000）

北古墳群（註17）、長畝山古墳群（註18）、河辺小学校裏古墳群（註19）、河辺上原古墳群（註20）などがあり、これらはいずれも横穴式石室採用以前のものであり、この時期から小規模の円墳が増え須恵器や鉄器など副葬品が豊富となる。またその中で、長畝山２号墳や西吉田北１号墳（註４）からは鍛冶具が、長畝山北古墳群や河辺上原古墳群からは鉄滓や鉄塊の出土した古墳もあり、被葬者と鉄器生産との関係が十分考えられる。横穴式石室墳としては陶棺の出土したクズレ塚古墳（註３）、天神原１号墳（註21）や的場古墳群（註22）､陶棺は無いが銀象嵌頭椎大刀の把頭や鞘尻金具の出土した柳谷古墳（註23）などがある。また、出土地不明の須恵質の家形陶棺が現国分寺に保管されており（註24）、同様な陶棺は津山市内では知られていない。

古代になると美作国分寺跡の西250ｍには、美作国分尼寺跡（註25）が存在する。確認調査をおこなった結果、瓦などの出土はあるものの、明確な伽藍配置などはわかっていない。また国府跡（註26）は北西4.5ｋｍ、加茂川を渡った旧吉田郡内に位置する。２時期の建物群があり古い時期の建物群は国府期以前のもので吉田郡衙の建物と考えられている。また国府へ至る官道は国分寺から北上して加茂川を渡るルート（註27）、さらに西に行って国分尼寺を経由し北上するルート（註28）などが考えられている。国分寺の東に位置する一貫西遺跡は、この官道沿いにあり総柱の倉庫や建物群とおびただしい数の鉄滓が出土し官営の製鉄関連遺跡と推測される。また西方の日上小深田遺跡（註29）では、古代の溝が出土し、北方には勝間田焼などが出土する中世を中心とした河原田遺跡（註30）や瓦器の出土した河辺上原遺跡（註20）などがある。近世になると、北西3.5ｋｍの鶴山に津山城が築かれ、城下町や街道が整備され、出雲街道は国分寺の北１ｋｍを通っている。

（註１）河本清他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会1975
行田裕美「天神原遺跡・天満神社１号墳の調査」『年報津山弥生の里第５号』津山弥生の里文化財センター1998
豊島雪絵「天神原遺跡発掘調査報告」『年報津山弥生の里第８号』津山弥生の里文化財センター2001
（註２）保田義治他「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集』津山市教育委員会1989
（註３）行田裕美・小郷利幸「崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会1990
（註４）坂本心平他「西吉田北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集』津山市教育委員会1997
（註５）行田裕美「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会1985
（註６）河本清他「金井別所遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集』中国電力株式会社新津山変電所文化財発掘調査委員会・津山市教育委員会1988
（註７）行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会1990
（註８）行田裕美他「大畑遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集』津山市教育委員会1993
（註９）木村祐子他「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会1991
（註10）湊哲夫「一貫東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』津山市教育委員会1992
（註11）近藤義郎他「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会1997
（註12）「国分寺飯塚古墳」『津山の文化財』津山市教育委員会1998
（註13）津山市教育委員会が平成13年度に発掘調査。
（註14）小郷利幸「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津山市教育委員会1994
（註15）安川豊史「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集』津山市教育委員会1998
（註16）保田義治「茶山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集』津山市教育委員会1989
（註17）行田裕美他「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会1992
（註18）今井堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第１巻原始・古代』津山市史編さん委員会1972

坂本心平「長畝山２号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里第３号』津山弥生の里文化財センター1996
（註19）平岡正宏「河辺小学校裏古墳群発掘調査報告」『年報津山弥生の里第５号』津山弥生の里文化財センター1998
（註20）小郷利幸「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』津山市教育委員会1994
（註21）行田裕美・保田義治「津山市天神原１号墳」『古代吉備第11集』古代吉備研究会1989
（註22）安川豊史他「的場古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集』津山市教育委員会2001
（註23）保田義治「柳谷古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集』津山市教育委員会1988
（註24）津山郷土博物館で常設展示されている。
（註25）湊哲夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集』津山市教育委員会1983
（註26）岡田博他「美作国府」『岡 R県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会1973
岡田博「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会1978
安川豊史「美作国府跡発掘調査報告－総社・小原線道路改良工事に伴う発掘調査－」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集』津山市教育委員会1984
安川豊史「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集』津山市教育委員会1994
安川豊史「美作国府跡―日本生命社宅新築に伴う発掘調査―」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第56集』津山市教育委員会1995
平岡正宏「美作国府跡（総社小林アパート）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第２号』津山弥生の里文化財センター1995
平岡正宏「美作国府跡（藤森地点）の調査」『年報津山弥生の里第３号』津山弥生の里文化財センター1996
安川豊史「美作国府跡（総社33番地―１）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第６号』津山弥生の里文化財センター1999
（註27）中村太一「山陽道美作支路の復原的研究」『歴史地理学第150号』歴史地理学会1990
（註28）湊哲夫「国分寺跡・国分尼寺跡」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社1992
（註29）安川豊史・川村雪絵「日上小深田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第66集』津山市教育委員会2000
（註30）行田裕美・平岡正宏「津山市国分寺河原田周辺採集の遺物」『古代吉備第16集』古代吉備研究会1994

## Ⅱ．過去の調査概要

美作国分寺跡は、昭和51年度から昭和54年度の4次にわたる調査（T1～T36）で南門、中門、金堂、講堂の位地及び規模や構造、塔の推定位置、寺域の東端などが、部分的であるが判明し報告書にまとめられている（註1）。それによると寺域は方2町で中央に南門、中門、金堂、講堂が一直線上に並び、金堂と中門を回廊が結び、回廊の外の南東側に塔が位地する（第2図）。その後、今回の調査に至るまでに数度の確認調査（T37～T42）などがおこなわれ、一部についてはすでに報告されている。以下、それらの概要について簡単にまとめる。尚、第1次調査（昭和51年度、T1～2）、第2次調査（昭和52年度、T3～11）、第3次調査（昭和53年度、T12～27）、第4次調査（昭和54年度、T28～36）の詳細は省略する。

T37（第2・3図）　T37からT39は昭和58年に農業用水合理化対策事業としてパイプ埋設に伴い調査したものである。T37はT32の北側、回廊推定地部分で長さ13m、幅1m程のトレンチである。地山削り出しによる回廊基壇部分が検出され、現状で基底部は幅4.8mを測る。尚、過去の調査で回廊基壇幅を8.3mと推定している事から、大部分が削平されているものと考えられる。また東側は河原石と瓦を含む土壌によって切られている。

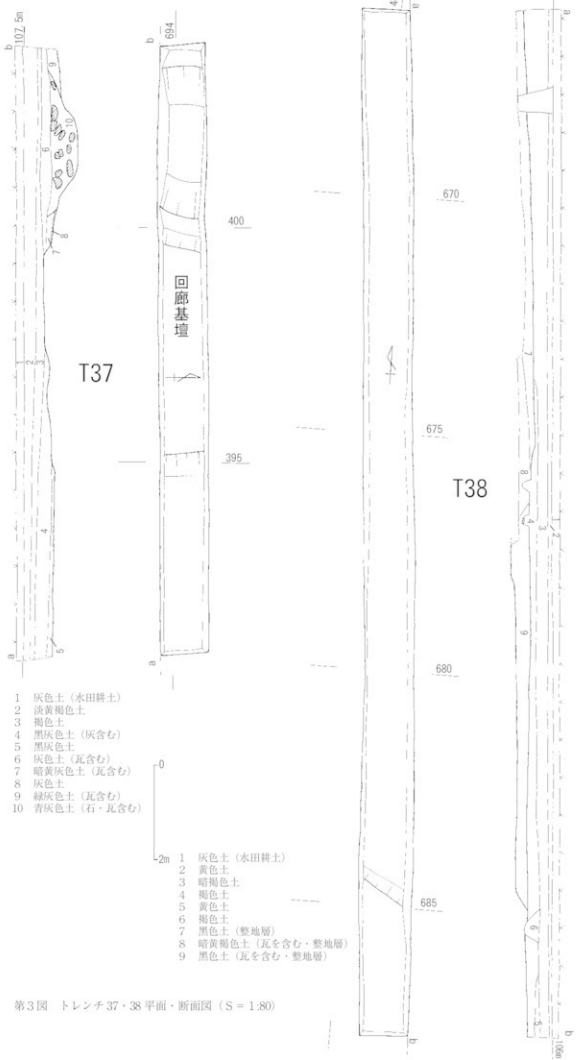
T38（第2・3図）　西側の回廊推定部分に長さ21.7m、幅1.1m程のトレンチをいれた。T37のように基壇基底部は検出されていない。すでに削平されているものと考えられる。全掘していないが整地層が見られる。

T39（第2・4図）　中門の西側の回廊部分に長さ10m、幅1m程のトレンチをいれた。全掘していないが基壇の基礎部分（第4図トーン部分）を確認している。現状で厚さ5～10cm程の層を水平に積んでおり7層確認できる。また北側では雨落溝らしき溝があるが伴うかどうかは明瞭でない。

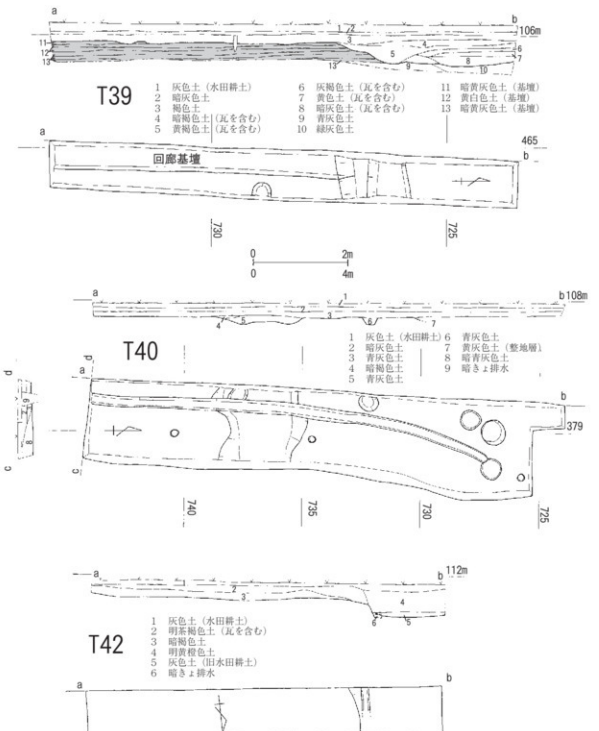
T40（第2・4図）　昭和58年、駐車場造成に伴い塔推定地の西側に長さ20m、幅3.4m程のトレンチをいれた。この部分は塔の北西隅部分にあたるが、道を挟んだ東側より一段低い部分であるため、塔に関係する遺構は検出されていない。すでに削平されているものと考えられる。北側には整地層が見られ、溝状遺構や柱穴、暗渠排水などが確認されているがいずれも新しい時期のものである。

T41（第2・5図、註2）　平成8年10月23日から30日まで、個人住宅建設に伴いトレンチを1箇所設定した。調査概要はすでにまとめられている。そのときのトレンチには番号はついていないが、続き番号からT41とする。調査地点は寺域の西端と推測される所である。長さ25m、幅2mのトレンチを設定し、2条の溝と不明遺構1を検出した。特に溝1（SD1）は南北溝で寺域の西を区画する溝と考えられる。また溝2（SD2）との間を築地と考えると、溝2は雨落ち溝の可能性も大きい。出土遺物のほとんどは瓦片であるが、軒瓦や塼、須恵器、勝間田焼などがある。

T42（第2・4図）　現国分寺の回向堂建設に伴いトレンチを1箇所いれた。場所は寺域推定地の外でT30の北側である。調査は平成12年3月13日から22日まで実施した。長さ15m、幅2mのトレンチを設定した。トレンチの西側3分の1程は元々1段低い水田であった事がわかり、現在の水田面はこれを埋めてつくられている。この低い水田には暗渠が造られており、それに現代の瓦を使用している。これら状況はT30と同様である。この下層水田の耕作土の下は地山面であり、元々の地山は西に向かって傾斜をもっている。美作国分寺の時期の遺構等は存在しない。出土遺物には瓦、須恵器などがある。




第3図　トレンチ37・38平面・断面図（S＝1:80）




第4図　トレンチ39・40・42平面・断面図（T 39…S＝1：80、他はS＝1：160、T 42の方位は磁北である）

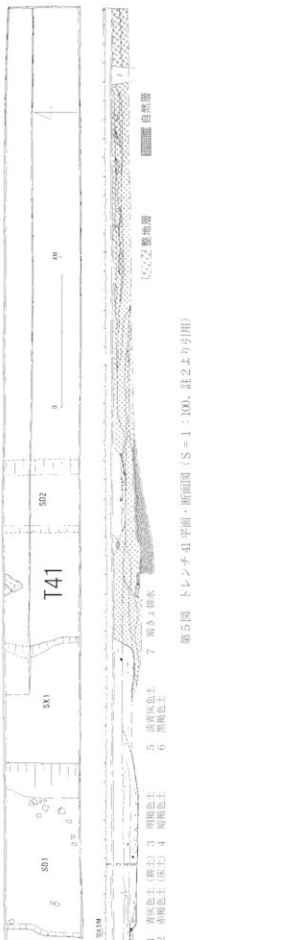
その他、岡山県教育委員会が調査したものに以下のものがある。

県道金屋国分寺線改良（註３） 岡山県教育委員会が県道改良工事で立会調査を実施している。平成11年１月18日の立会調査で溝らしきもの、遺物包含層などを検出している。位置的には寺域の北端辺りと推測される。出土遺物に瓦、須恵器がある。

（註１）湊哲夫・安川豊史・行田裕美「美作国分寺跡発掘調査報告」津山市教育委員会1980

（註２）行田裕美「個人住宅建設に伴う美作国分寺跡確認調査」『年報津山弥生の里第５号』津山弥生の里文化財センター1998

（註３）「その他の調査」『岡山県埋蔵文化財報告29』岡山県教育委員会1999




第５図　トレンチ41平面・断面図（S＝1：100、註２より引用）

## Ⅲ．調査の経過

### １．調査に至る経過

前章で述べたように、過去の調査で寺域の範囲と伽藍配置の内、南門、中門、金堂、講堂については位置や構造等がある程度判明していた。その中で塔については位置などがある程度わかっていたが、その詳細については明確でなかった。そのため、塔の規模や基壇の構造などを確認する事を目的とした調査を実施する事とした。調査は平成12年４月24日から開始した。尚、津教委文第4011号により、文化財保護法第58条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を５月８日付けで岡山県教育委員会教育長宛に提出している。調査の終了は６月20日である。

今回の調査地点は津山市国分寺497－１、497－２、483番地である。なお今回のトレンチは大きく３地点あるため通算ではＴ43～45となる。Ｔ43は497－１、Ｔ44は497－２、Ｔ45は483番地である。また調査面積は３トレンチ合計で約２３５㎡である。

### ２．調査経過

４月24日　発掘調査機材を搬入する。
５月１日　Ｔ43の調査を開始する。まず東西・南北方向にトレンチをいれる。
５月２日　トレンチで犬走り等が検出されたため東側へ調査区を拡張する。
５月８日　基壇周囲の犬走りと雨落ち溝を検出し、さらに調査区外の東側へそれらが延びている事がわかる。
５月９日　雨落ち溝の南東隅を検出するため一部を東に拡張し水田の畦部分を掘り下げる。
５月11日　拡張区で雨落溝の南東隅を検出する。雨落溝は残りが悪かったが外側の列石を検出した。またトレンチの西側へも調査区を拡張する。
５月12日　津山市文化財保護委員の狩野久先生現地を視察する。
５月20日　美作考古学談話会が現地見学をする。
５月22日　Ｔ43の基壇部分を断ち割る。
５月23日　文化庁坂井秀弥文化財調査官が現地を視察する。
５月24日　Ｔ44・45の調査を開始する。犬走りと雨落溝を確認し、Ｔ45は現国分寺の池の中を掘り犬走りの北東隅を確認する。
５月25日　Ｔ44・45の写真撮影をおこなう。また写真撮影のため全体の掃除をおこなう。
５月26日　ラジコンのヘリコプターで航空写真を撮影する。調査区の遠景、遺構全体写真などを撮る。津山市文化財保護委員９名が現地を視察する。Ｔ45の平面図を実測する。
５月27日　現地説明会を開催する。当日は雨にもかかわらず約７０名が見学に訪れる。前日の大雨で国分寺の池が増水し、Ｔ45が水没する。そのため池の護岸が崩れてしまう。
５月29日　発掘調査をほぼ終了し、明日から遺構の測量をおこなう。
５月30日　遺構の測量を開始する。測量には文化財センター職員の応援をえる。
６月６～７日　地元の河辺小学校６年生（80名）が現地見学に訪れる。
６月12日　Ｔ44の出土遺物（瓦）を取り上げる。
６月20日　重機でＴ43・44の埋め戻し作業をおこない、Ｔ45の池の護岸を修復する。発掘調査機材搬出をおこない全作業を終了する。

## 3．調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下の通りである。

津山市教育委員会　教育長　松尾康義
教育次長　森元弘之
文化課長　内藤正剛
文化財センター所長　中山俊紀
次長　安川豊史
主任　小郷利幸（調査担当）
主任　平岡正宏（調査担当）
主事　豊島雪絵（調査・事務担当）

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子竹内信亘、内海奈々恵が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。（敬称略）

稲垣光男、稲垣裕史、梶尾嘉明、加藤文平、末沢敏男、谷口末男、野口定男、藤木靖史、藤沢淳一郎、森二三夫、森　幸男

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで津山弥生の里文化財センター職員及び下記の方々の指導、助言、協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

井汲節子（地権者）、田中孝照（地権者）、池田和雅、角田徳幸、狩野　久、坂井秀弥、圃　正雄、土居　徹、福本　明、松本和男、湊　哲夫、山崎　修

1、遺構（塔跡）

（1）層序

（T 43、第6・7図）

塔推定地に東西・南北方向のトレンチ（幅1～1.5m）をいれ、塔基壇の東端の一部と南端を確認し調査区を東西に拡張した。特に東側では基壇の4分の1程を検出し、さらに雨落ち溝の南東隅を確認するため、水田の畦部分を一部拡張して掘り下げた。西側では基壇部分の削平が大きいため犬走りと雨落ち溝部分のみを検出した。まず東西方向の土層（a－b）では、耕作土を除去するとすぐ直下が基壇面であり、大きな石が複数露出している。これら石は基壇部分に埋め込まれていたものである。これら石があるため全部を断割っていないが、部分的に地山面を検出した。それによると地山は東から西に向かって傾斜しており、地山を掘りこんだような形跡はなく現状で基壇上面から最大1.2mの深さがある。この基礎部分の埋土は40cm程を明褐色土1層で堅くたたきしめて埋めた後、厚さ5cm程の黒色土との互層による版築で入念に埋め、その上は単層の2層があり、石はこの土層中に入っている。石は河原石で15cmから最大で45cm程度のものもある。これら石は広範囲に分布するため、礎石の根石部分などに重点的に置かれているような状況とは言いにくいが、地山面が低くなる中心部から西側にかけて比較的多いようである。また基壇については犬走り上面から最大で高さ30cm程しか残っていないため、礎石を含め基壇の多くがすでに削平されている。そのため基壇化粧も明瞭とは言いがたいが、南東隅部分で乱石積みと考えられる基底石を確認している。南北土層（c－d）も、基本層序は東西土層と同様であるが、北側の中心部付近では石がかなり低い部分にも埋められている。このあたりが心礎部分であるためであろうが、そのすえ付け痕もすでに見られない。また、雨落溝の外にも延長してトレンチを入れた結果、地山面は南から北に向かって低くなっているため、地山面を緩やかな段状にカットして平らな面を作り出し、そこに雨落溝や犬走りを構築している。

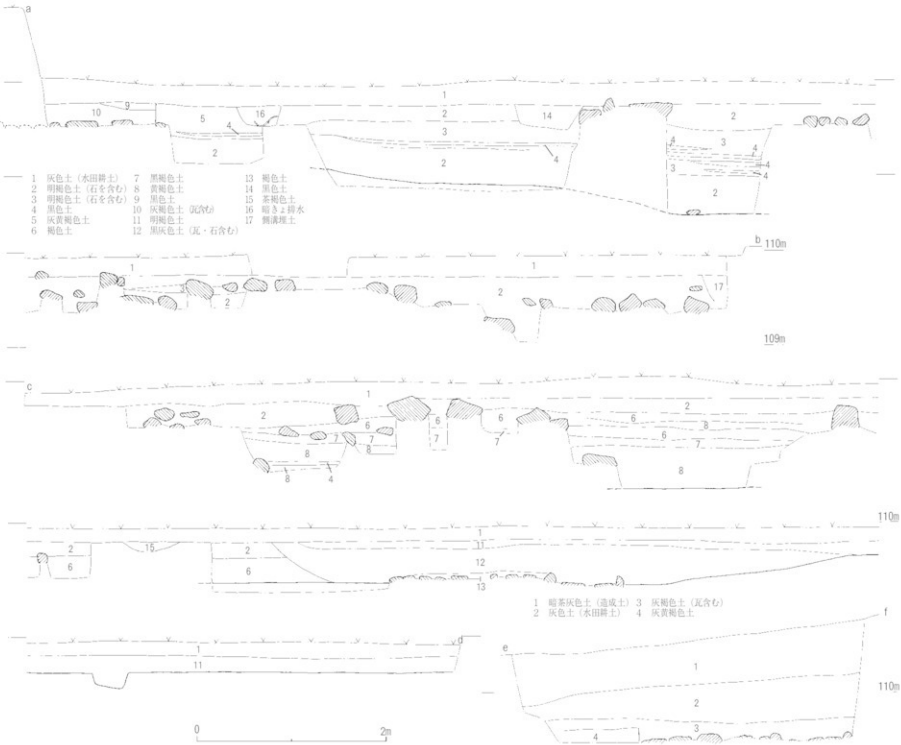
（T 44、第6・7図）

T 43の北側、現国分寺との間は元々同一の田んぼであったが、それが埋められて現在仮設の道となっている。T 43で犬走りなどが北にのびている事が確認できたため、この道に長さ3.8m、幅0.8m程のトレンチを設定した。土層（e－f）は造成土と耕作土の下が瓦を含む遺物包含層で、この下で犬走りと雨落溝を検出し、さらにこれらが北にのびている事がわかった。また基壇部分は高さ10cm程しか残存しないため、基壇化粧の石などはすでに見られない。

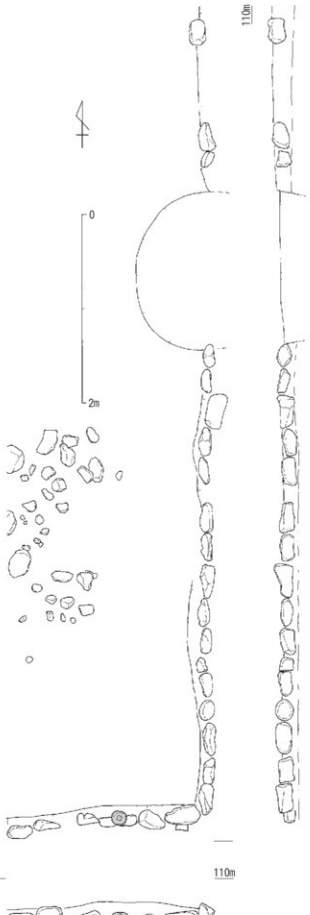
（T 45、第6図）

T 44でさらに犬走りなどが北にのびているため、現国分寺の境内の中にトレンチを設定した。ちょうどこの部分には池があったため、この池の中の南西隅にトレンチをいれた。トレンチは長さ3m、幅1m程であるが、池の中ということもあって、調査はかなり悪戦苦闘した。池の水を抜きながら周囲に土留めをおこない堆積土を除去すると、T 44同様瓦を含む遺物包含層が若干あり、その下から河原石による犬走り・雨落溝部分がでてきた。比較的石の残りはよかったが、雨落溝北東隅部分の北側の石はすでに無くなっている。

（2）基壇




第7図　トレンチ43・44土層図（S=1:40）




第８図　基壇化粧平面・立面図（S=1:40）

（T 43、第６・８図）

基壇については土層の所でも述べたように残りが悪く、高さ 20 ～ 40 ㎝程であるが全体の４分の１程を調査し南東隅を検出した。このコーナー部分から北へ 8.5 m、西へ２mの辺りまで河原石が横に１列並んでおり、現状で１段のみである。これら石の多くは横長のもので横に立てて置いているが、中には円礫のようなものもある。また南側ではこの石の上に軒丸瓦の瓦当が置かれている個所が１箇所ある（第８図トーン部分）が、これが当初から置かれていたかどうかは、基壇の多くが削平されているため明瞭でない。これら石は基壇化粧の基底部と考えられ、基壇化粧は乱石積みと考えられる。この基壇の上面には後世の土壙や溝が多くあり、礎石やそれらの据付痕などもすでに無く、すべて削平されているようである。また、北東側で犬走りの石が無く、基壇が幅 50 ㎝、長さ 1.5 m 以上クランク状に出っ張った部分がある。この部分には石はまったく無く、石を抜き取った跡も見られない。この出っ張りはトレンチ 44 では見られないためこの間で解消しているものと考えられる。この性格については明瞭でないが、この部分に階段などの施設がついていたのかもしれない。

（T 44、第６図）

基壇部分は高さ 10 ㎝程で、基壇化粧に使用された石などは検出されていない。

（３）犬走り・雨落溝

（T 43、第６・９図）

基壇の外側に河原石を敷き詰めた犬走りがあり、幅は残りの良い南側で２mある。その外側には幅 0.9 m 程の雨落溝が巡っている。雨落溝の両側は石を横にして立てて置き、犬走りより一段低くなっている。雨落溝の底石の代わりに軒丸瓦の瓦当を使用している個所

が西側に２ヶ所ある（第９図中央トーン部分）。また雨落溝内に軒平瓦と平瓦が屋根からずり落ちた状況で出土している個所が南側にある（同上）。さらに南側一帯は周囲より１段低い位置に雨落溝が作られているため、おそらく雨が降れば周囲の水が雨落溝に流れてしまう。そのため雨落ち溝のレベルを東から西に向かって傾斜させ、水を西側に排水させるようにしているようである。ちなみに南辺の雨落溝のレベルは東と西では最大12㎝西側のほうが低く、犬走りも同様に傾斜がある。（Ｔ44、第６図）

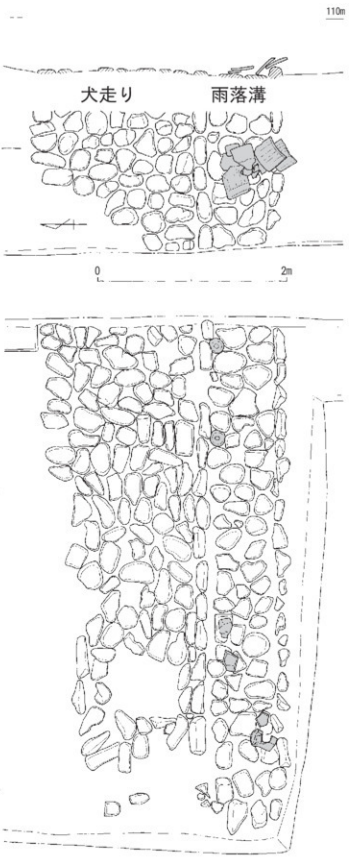
犬走りは幅1.8ｍ、雨落溝は幅0.8ｍである。いずれの幅も南側と比べるとやや小さい。（Ｔ45、第６図）

犬走りの北東隅を検出し、その外側に雨落溝があるが、北側ではすでに石が無く、内側の横に並べた石のみである。雨落溝の幅は東側で0.9ｍを測る。

以上から、塔の規模を復元すると雨落ち溝を含む一辺23.8ｍ、基壇底辺の一辺17.9ｍと言った数値が得られる。詳細な検討は次章にゆずる。

（４）その他の遺構

トレンチ43の基壇上や犬走り・雨落溝内に溝や土壙などがある。基壇上の溝１（ＳＤ１）は幅0.5ｍ．北から南へ弧をえがいてのびている。その他の土壙は円形のものが多く、中には石囲いがあるもの（ＳＫ１）、素掘りのもの（ＳＫ２）、柱穴状（ＳＫ３）のものもある。これらの多くは瓦や陶磁器類が出土し近世以降のものがほとんどである。




第９図　雨落溝内瓦出土状況（S=1:40）

## 2．遺物

調査区全域からは多量の瓦、若干の土器類などが出土している。これらの遺物のうち、遺構に伴って出土しているものはごくわずかであり、その大部分は表土から遺構面までの堆積土中から出土している。これらの遺物について以下、瓦せん類、青銅製品、その他の遺物の順に記載する。

（1）瓦・塼

瓦塼類については、調査区の全域から大量に出土している。そのほとんどは丸瓦・平瓦の細片であり、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦片、せん若干が含まれる。これらの遺物については過去の調査報告の際などに詳細に検討されており（註1）、それらの成果を援用しながら説明を行う。軒瓦の型式名については「美作国分寺跡発掘調査報告」（以下「報告」とする）によっている。

a．軒丸瓦（第10図）

今回の調査では89点出土している。2型式5種、その他型式の不明なものがある。

Ⅰ-a型式（1）

4点出土している。複弁8弁蓮華文である。大型の中房内に1＋8の蓮子を配している。複弁は中央に界線が存在し、弁ごとに隆起した子葉を配置する。間弁はY字形を呈する。連弁の基部は中房を取り巻く圏線に接し、弁の先端は内区と外区を画している圏線に接してない。内外区の境界の圏線は二重であり、外区には凸鋸歯文を配置している。平城宮6225C型式（註2）に極めて類似する文様構成である。

丸瓦は接合式であり、凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面は若干の布目が認められる。胎土には2～3mm台の白色砂粒を多く含み、色調は灰白色、焼成はあまり良くなく軟質である。ただし1点のみ青灰色を呈し、硬質な小片が存在している。

Ⅰ-b型式（2）

21点出土している。複弁8弁蓮華文であり、特徴はⅠ-aと同様であるが、間弁がⅠ-aのY字形から楔形に変化したものである。凸鋸歯文が明瞭でない個体が多く、全体的にⅠ-aよりもシャープさに欠けるようである。

丸瓦は接合式であり、凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面には布目が認められ、瓦当部裏側付近では接合のためにナデ消されている。胎土には2～3mm台の白色砂粒を多く含み、色調は黒から黒灰色、焼成は良くなく軟質である。

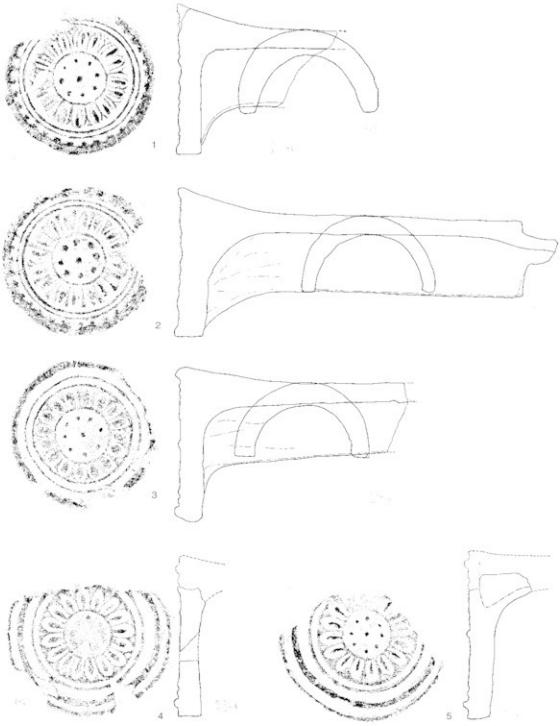
第10図2はほぼ完存する例であり、全長は40.5cmである。

Ⅱ-a型式（3）

34点出土している。単弁16弁蓮華文である。中房内に1＋8の蓮子を配置する。連弁には浅い子葉を持ち、連弁の基部は中房を取り巻く圏線に接し、弁の先端は丸く収まり内区と外区を画している圏線には接してない。高く突出した外縁には鋸歯文は配されない。外縁のさらに外側に幅2mm程度の狭い平坦面を持つ個体が5点存在している。これは既に指摘されているように（註3）瓦当面の粘土の直径が瓦笵よりも大きいために生じたものである。

丸瓦はⅠ型式同様接合式であり、凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面は布目が認められる。胎土には1～2mm程度の白色砂粒を多く含み、色調は灰白色から黒色とバリエーションがあり、焼成は良くなく軟質である。

Ⅱ-b型式（4・5）



第10図　軒丸瓦実測図（S＝1：4）

18点出土している。単弁16弁蓮華文であり、その特徴はⅡ-a型式に似るが、1＋8の蓮子を配する中房はやや小さく、弁は細く先端が尖る。18点すべてが外区外縁のさらに外側に幅5mm～8mm程度の平坦面を持つ。

丸瓦はこれも接合式であるが、丸瓦を観察できる個体は存在しない。胎土には1～2mm程度の白色砂粒を多く含み、色調は黒灰色から暗褐色であり、焼成は良くなく軟質である。

b．軒平瓦（第11図）

今回の調査で59点出土している。2型式4種、その他型式不明のものがある。

Ⅰ-a型式（6～8）

11点出土している。均整唐草文である。内区には上界線に接する花頭の周りに中心葉を置き、その左右に3単位ずつの唐草を配置する。中心葉は花頭端部に接しない。外区には二重の圏線がめぐる。平城宮6663C型式（註4）に類似する文様構成である。瓦当面右端に笵割れの痕跡をとどめるものが2個体存在している（第11図8）。

すべて曲線顎であり、面取り部分は2.0～3.6cm程度で比較的広い。平瓦部を残す個体が少ないため明らかではないが、凹面は概ね布目であり、凸面は観察できる個体はすべて縄叩き目の痕跡を残している。瓦当部付近は凹面は横方向のヘラケズリ、凸面は縦方向のヘラケズリで整えられている。

胎土には2～3mm台の白色砂粒を多く含み、色調は黒灰色から茶褐色で、焼成はあまり良くなく軟質である。火を受けたと思われる断面が赤変した個体が比較的多い。

Ⅰ-b型式（9）

26点出土している。Ⅰ-a型式とほぼ同様の特徴を持つが、中心葉が花頭端部に接し、中心葉の下端部が著しく細くなっている。

すべて曲線顎であり、面取り部分は2.5～3.6cm程度で比較的広「。段顎に近い形状を示す個体も存在する。こちらも平瓦部を残す個体が少ないため明らかではないが、凹面は概ね布目であり、凸面はほとんどが縄叩き目の痕跡を残しているが、平行叩き目の痕跡を残すものが2個体ある。瓦当部付近は凹面は横方向のヘラケズリ、凸面は縦方向のヘラケズリで整えられている。

胎土には2～3mm台の白色砂粒を多く含み、色調は概ね黒灰色であるが一部に灰白色ものを含む。焼成はあまり良くなく軟質である。

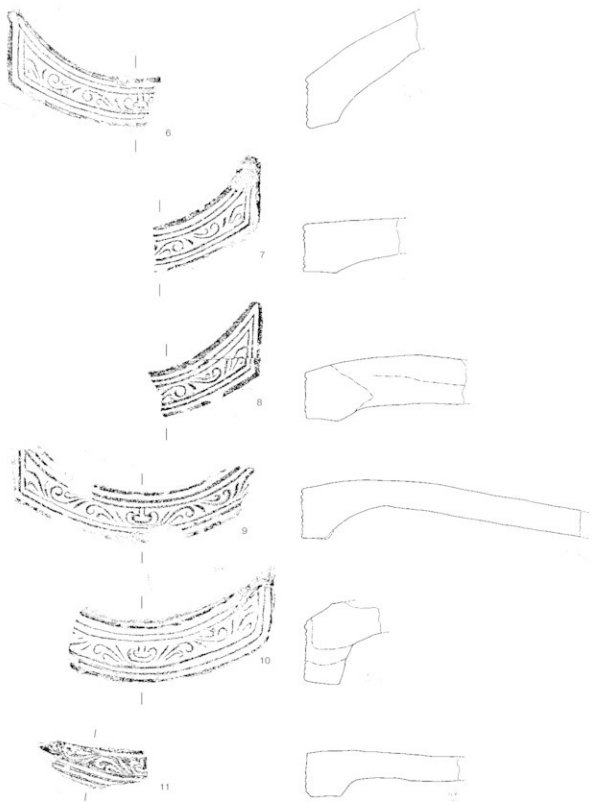
Ⅰ-e型式（10）

9点出土している。基本的な文様構成はⅠ-a、Ⅰ-b型式と同様であるが、花頭基部が上界線から離れている。また、内区の右第3単位主葉と第2支葉との間に小さな支葉が入り、左右が対象でなくなっている。基本的には三重の圏線がめぐるが、笵と瓦当のサイズが合ってないために上下左右の圏線の数が少なくなっている個体が多い。

すべて段顎であり、粘土接合によっている。平瓦凹面は概ね布目であり、凸面はほとんどが平行叩き目の痕跡を残しており、縄叩き目の痕跡を残すものは認められない。瓦当部付近は端面のみ若干のヘラケズリを施すが、顎面まで平行叩き目の痕跡を残す個体が3点存在している。

胎土には2～3mm台の白色砂粒を多く含ン、色調は概ね黒灰色である。焼成はあまり良くなく軟質なものが多い。

Ⅶ型式（11）

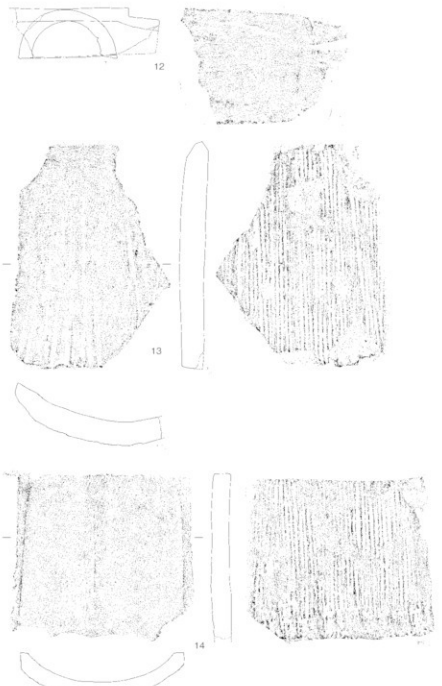



第11図　軒平瓦実測図（S＝1：4）

1点のみの出土である。通常の軒平瓦とは文様の凹凸が逆転している個体である。中心飾りはⅠ型式と同様の形のようであり、上界線からは離れている。圏線は下は三重であるが、上はほとんど消失している。笵と瓦当サイズが一致していないためであろう。

粘土接合による段顎である。凹面には布目痕を、凸面には平行叩き目痕を残している。平行叩き目痕は顎部にも存在している。胎土は若干の白色砂粒を含み、焼成は軟質で青灰色を呈する。

この個体は製作技法の点でⅠ-e型式に類似しており、文様についてもⅠ-e型式と同様、中心飾りが上界線から離れているという特徴を持っている。おそらくⅠ-e型式と同時期にⅠ-e型式の製品それ自体を笵として作られたものであろう。




第12図　丸瓦・平瓦実測図（1）（S＝1：6）

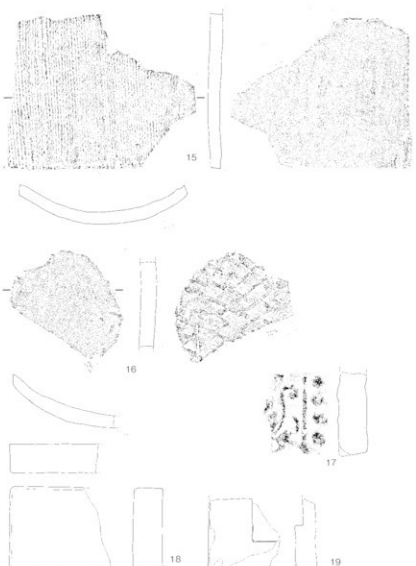
c．丸瓦（第12図12）

丸瓦については前述のように細片がほとんどであり、計測可能な個体はほとんど存在しない。ここでは1点のみ紹介する。この個体は玉縁式のもので、全長は不明、玉縁長5.0cm、幅は15.4cm、高さ8.4cm、厚さ1.9cmである。凸面は摩滅により調整は不明、凹面は布目である。面取りは観察できない。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成はやや不良で黒灰色を呈する。「報告」のB類に相当するものであろうか。

d．平瓦（第12図13・14、第13図15・16）

丸瓦同様、そのほとんどが細片であり、計測可能なもののうち代表的なものについて紹介する。

13・14は凸面が平行叩き目を施すものである。叩き目は側縁に対して平行に、全面に施される。13は全長35cm、広端面での厚さ4.1cmを計測する。凹面狭端部に2.7cm程度、側面に3cm程度の面取りを施している。凹面の布目はかなり粗いものである。胎土には砂粒を多く含み焼成不良で赤褐色を呈する。「報告」において「平行叩き目a」とされたものである。14は狭端幅25.2cmで、狭端での厚さ2.5cmを測る。凹面には13よりも細かい布目と糸切りの痕跡が認められる。両側縁に幅1cm程度の狭




第13図　平瓦・丸瓦・埴実測図（1）（S＝1：6）

い面取りを施す。これも「平行叩き目a」に含まれるものであり、胎土は13同様であるが、焼成はやや良好で黒色を呈する。

15は凸面に縄叩き目を施すものである。叩き目は側縁に平行して全面に施されている。広端面、両側縁には面取りは施されない。厚さは広端部で1.6cm程度と薄い。白色砂粒を多く含む胎土で、焼成はやや甘く、黒灰色を呈する。「報告」で「縄叩き目a」とされたものである。

16は凸面に格子叩き目を施すものである。叩き目は全面に施されているようである。格子目は菱形を呈し、一辺が1.6cm程度である。凹面は布目であり、側縁部に1cm内外の狭い面取りを施している。胎土は若干の砂粒を含むものの概ね精良であり、焼成も良好で青灰色を呈している。

| | 軒丸瓦 | | | | | | | | | | | 軒平瓦 | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | Ⅰ－a | Ⅰ－b | Ⅰ | Ⅱ－a | Ⅱ－b | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ | 不明 | 計 | Ⅰ－a | Ⅰ－b | Ⅰ－c | Ⅰ－d | Ⅰ－e | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅷ | 不明 | 計 |
| T-1 | | | | | | | | | | | 0 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| T-2 | | | 1 | 1 | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | 0 |
| T-3 | | | 1 | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| T-4 | 3 | 4 | 2 | 2 | | 1 | 1 | 30 | | | 43 | 4 | 4 | 1 | | | 4 | 6 | | | | 19 |
| T-5 | 1 | | 1 | | | | | | | 1 | 3 | 2 | 2 | | | | 3 | 2 | | | | 9 |
| T-6 | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 0 |
| T-8 | | 5 | 6 | 3 | | | | | | | 14 | | 11 | | | 1 | 3 | | | 1 | | 16 |
| T-9 | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| T-10 | | 1 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| T-11 | | 3 | 2 | 3 | | 2 | 1 | | | | 11 | | 2 | | | 1 | 1 | | | | | 4 |
| T-12 | | 1 | 1 | 2 | | | | | | 2 | 6 | | | | | 2 | 1 | | | | | 3 |
| T-13 | 2 | 2 | | 3 | | 1 | | 6 | | | 14 | 10 | 9 | | | 10 | 8 | 9 | | | | 46 |
| T-14 | | | | | | | | | | | 0 | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| T-16 | | | 1 | | | | | 2 | | | 3 | 2 | | | | | 2 | 1 | | | | 5 |
| T-17 | | 1 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 0 |
| T-18 | | 2 | | 1 | | | | | | | 3 | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| T-19 | | | 1 | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| T-20 | | 1 | 1 | | | | | | | | 2 | 1 | 2 | | | | | | | | | 3 |
| T-21 | | 2 | 1 | 2 | | 1 | 1 | 1 | | | 8 | | 1 | | | | 2 | | | 1 | | 4 |
| T-22 | | 4 | 6 | 1 | | | | | | | 11 | | 1 | | | | 1 | | | 2 | | 4 |
| T-23 | | | 1 | 3 | | | 1 | | | | 5 | 2 | 3 | | | 1 | 3 | | | | | 9 |
| T-24 | 2 | 4 | | 11 | | 5 | 2 | | | 1 | 25 | 5 | 6 | 2 | | 4 | 10 | | | 1 | | 28 |
| T-25 | | | 1 | 1 | | | | 1 | | | 3 | | | | | | | | | | | 0 |
| T-27 | | 6 | | 12 | | | | | | | 18 | 1 | 4 | 1 | | 1 | 1 | | | | | 8 |
| T-29 | | | | | | | | | | | 0 | | 2 | | | | | | | | | 2 |
| T-31 | | 11 | 1 | 5 | | | | | | 3 | 20 | 1 | 2 | 1 | | 1 | | | | | | 5 |
| T-32 | | 2 | | 2 | | | | | | | 4 | | 2 | | | | 1 | | | | | 3 |
| T-33 | | | | | | | | | | | 0 | | 4 | | | | | | | | | 4 |
| T-35 | | 1 | | | | | | | 1 | | 2 | | | | | | 1 | | | 1 | | 2 |
| T-41 | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | 3 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| T-43 | 2 | 16 | 3 | 32 | | 13 | | | | 7 | 73 | 10 | 23 | | | 9 | 1 | | | | 7 | 50 |
| T-44 | | 1 | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| T-45 | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 0 |
| 不明 | 4 | 4 | 1 | 2 | | 5 | | | | 2 | 18 | 3 | 4 | | 1 | 2 | 5 | 1 | | | 5 | 21 |
| 合計 | 14 | 72 | 32 | 89 | | 28 | 6 | 40 | 2 | 16 | 299 | 44 | 86 | 5 | 1 | 32 | 48 | 20 | 6 | 12 | 254 | |
| 比率 | 5% | 24% | 11% | 30% | | 9% | 2% | 13% | 1% | 5% | 100% | 17% | 34% | 2% | 0% | 13% | 19% | 8% | 2% | 5% | 100% | |
| | 39% | | | 41% | | | | | | | | 51% | | | | 13% | | | | | | |

第1表　軒瓦の型式別分布(「報告」掲載表に加筆・作成)

e．鬼瓦（第13図17）

1点のみの出土である。「報告」に記載されている鬼瓦と同一種と思われるものの右下端である。内部に唐草文を施し、界線を挟んで外側に径2.1cm程度の大型の珠文を配置する。厚さは4.1cmである。胎土には砂粒を多く含み焼成不良で灰黒色を呈する。

f．塼（第13図18・19）

3点出土している。うち2点を図示した。18は幅13cm、長さは不明、厚さ4.6cmの長方形の個体である。「報告」による厚さの分類でいえばA群に属し、その中でももっとも薄手のものである。19もおそらく塼であると思われるが、表面に1cm程度の窪みが認められる。厚さなどは不明である。いずれも砂粒を多く含み、焼成は不良で黒灰色を呈する。

（2）青銅製品（第14図）

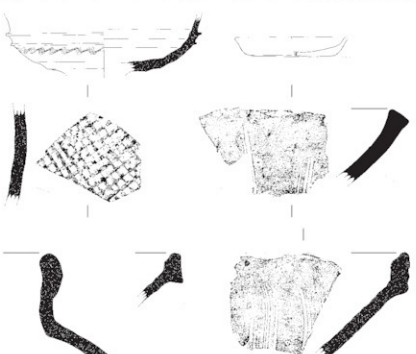
トレンチの南端、基壇よりも外側の埋土から出土している。下部は緩やかに弧をえがき、中ほどに凹みが認められるが、全体の形態は明らかではない。類例より推察して風招の一部ではないかと思われる。風招の形態についてはいくつかの研究があるが（註5）、本例は小片で全体の形が不明であるため、いずれの形式に属するか判然としない。県内では関戸廃寺に出土例がある（註6）。

第14図　青銅製品実測図（S＝1:

（3）その他の遺物（第15図）

瓦せん類、青銅製品以外で国分寺に伴うと思われる遺物はほとんど皆無であった。その中で、遺構面までの堆積層の中から若干の遺物が出土しているので、紹介しておく。

21は須恵器高杯である。2本のシャープな稜線がめぐり、その下に櫛描き波状文を施している。精



第15図　遺構に伴わない遺物（S＝1:4）

良な胎土で青灰色を呈する。22は土師器小皿である。摩滅が著しく、底部の切り離し技法は不明である。細かな砂粒を含む胎土で軟質で赤橙色を呈する。23は勝間田焼甕の胴部破片である。外面は格子叩き目、内面は横方向のナデである。胎土、焼成ともに良好で青灰色を呈している。24～27は備前焼である。25は甕、それ以外は擂鉢である。いずれも赤褐色を呈し、良好な焼成である。24･25はⅣ期（註７）、26・27はⅤ期であろうか。

（註１）以下の文献がある。
湊哲夫・安川豊史・行田裕美「美作国分寺跡発掘調査報告」津山市教育委員会1980
湊哲夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集』津山市教育委員会1983
山崎信二「平城宮・京と同笵の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」1994
（註２）奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』1978
（註３）註１　湊哲夫1983文献p.19
（註４）註２
（註５）岩本正二・西口寿生「飛鳥・藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』第63巻第１号1977、菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室『菅原遺跡』1982
（註６）安東康宏・岩崎仁司「関戸廃寺」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告３』笠岡市教育委員会1997
（註７）間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー60　1991

# V．まとめ

## 1．基壇の規模と構造について

塔跡は前回の調査において暗きょ排水掘削中という偶然の機会に発見されたため、極めて限られた調査で位置を推定したにとどまった。しかし今回の調査において、従来推定であった塔の規模・構造をほぼ確定することができた。以下にその概要を記述する。

（1）規模

T 43では基壇南と東側の犬走り及び雨落溝を確認することができ、特に犬走の南東隅を確定することができた。またT 44・T45においては基壇東側の犬走・雨落溝のT 43からの延長を、特にT 45においては犬走の北東隅を確認することができた。残念ながら基壇の本体は削平が著しく、わずかに南東隅において基壇化粧の一部を確認できたに過ぎない。これらの成果から基壇の規模について推定してみると、以下のようになる。

まず基壇の最外縁となるの雨落溝外縁については、T 43・44・45のトレンチ最東端においてそれぞれ東端を検出できており、ほぼ一直線に揃っている。また、雨落溝の幅は確認できる箇所ではほぼ80cmと一定である。よって雨落溝外縁の一辺の長さは、雨落溝南東隅からT 45の石の残存部分までの距離と、雨落溝の幅約80cmから復元して、約24 mとなる。ただし雨落溝外縁は東側と南側がなす角度は約88°でありややいびつな四角形とゝるようである。次に犬走の外縁であるが、T 45においてその北東隅から南側外縁までの距離が22.2 mとなる。犬走の幅については、南側の幅2 mに対して東側はT 44において1.8 mとやや異なった値を示している。

これらの値から犬走及び雨落溝の規模を示すと、雨落溝外縁は東西23.6 m、南北24.0 mであり、そこから雨落溝の幅を差し引いた犬走外縁の規模は東西22.0 m、南北22.4 mと復元することができる。さらに基壇本体の規模であるが、これは犬走の規模から推定するほかはない。すなわち犬走外縁の南北長が22.4 m、この値から犬走の幅南北それぞれ2 mずつを引いた値18.4 mが、基壇一辺の長さと推定できる（第16図）。

（2）構造

次にこの基壇の構造を検討する。

まず、基壇の築成において、掘り込み地業を施した形跡は認められない。また断ち割りの土層で明らかなように、厚さ30cmを超えるような層にかなり大きな石を混入させるようにして基壇を築成している。さらにこの石は基壇の推定中心部に集中する傾向が認められる。このような手法は金堂・講堂例のように厚さ5～10cm程度の土を互層につき固めたような状況とはまったく異なった手法である。さらに基壇の化粧についても乱石積みであり、中門に同様の例が認められるものの、金堂・講堂のせん積み基壇とは異なる点もあわせて注意される。

## 2．塔建立の時期について

これまで明らかとなった点をまとめ、塔の建立時期を検討してまとめとする。

まず、瓦についてみてみると、今回の調査で主として出土しているのは軒丸瓦がⅡ型式、軒平瓦がⅠ-a・b型式である（第2表）。ここで問題となるのが、「報告」では軒丸瓦Ⅱ型式は軒平瓦Ⅰ・e型式とセット関係になるとしているが、塔跡においては量的には軒丸瓦Ⅱ型式は軒平瓦Ⅰ-aおよびb型式と

| | 軒丸瓦 | | | | | | | | | | 軒平瓦 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | Ⅰ-a | Ⅰ-b | Ⅰ | Ⅱ-a | Ⅱ-b | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ・Ⅴ | 不明 | 計 | Ⅰ-a | Ⅰ-b | Ⅰ-c | Ⅰ-d | Ⅰ-e | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ～Ⅷ | 不明 | 計 |
| 南門 | 0% | 31% | 36% | 23% | 3% | 5% | 3% | 0% | 0% | 100% | 9% | 46% | 0% | 0% | 6% | 29% | 0% | 11% | 0% | 100% |
| | 67% | | | 31% | | | | | | | 54% | | | | | | | | | |
| 中門 | 6% | 24% | 4% | 48% | 13% | 6% | 0% | 2% | 0% | 100% | 15% | 30% | 8% | 0% | 15% | 30% | 0% | 3% | 0% | 100% |
| | 31% | | | 67% | | | | | | | 45% | | | | | | | | | |
| 金堂・講堂 | 8% | 13% | 10% | 14% | 3% | 1% | 49% | 0% | 4% | 100% | 23% | 20% | 1% | 0% | 14% | 21% | 21% | 0% | 0% | 100% |
| | 30% | | | 18% | | | | | | | 43% | | | | | | | | | |
| 塔 | 3% | 23% | 4% | 44% | 17% | 0% | 0% | 0% | 9% | 100% | 20% | 47% | 0% | 0% | 18% | 2% | 0% | 0% | 14% | 100% |
| | 29% | | | 61% | | | | | | | 67% | | | | | | | | | |

第２表　建物別軒瓦出土比率

組み合うのである。「報告」においてはⅡ型式軒丸瓦及び軒平瓦Ⅰ-e 型式について、奈良時代末から平安時代初頭の年代観を示しており、軒丸瓦Ⅱ型式が中門のトレンチで集中して出土している点に注目して、中門がその時期に補修を受けていると理解している。この点について「報告」と異なる見解を示しておく。

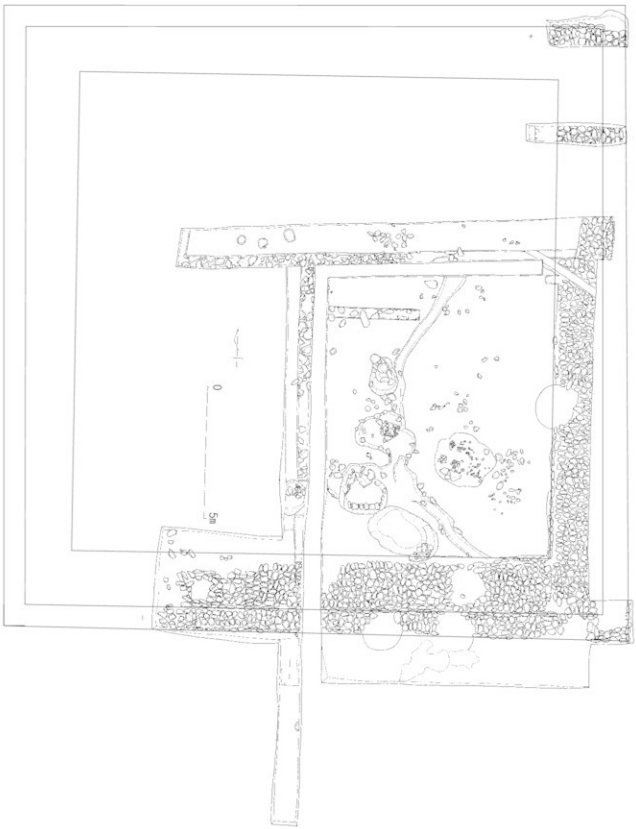
国分寺の個々の建物について軒瓦の出土比率を計算すると、前述の第２表のとおりとなる。この表から読み取れることは、南門、金堂・講堂においては軒丸瓦Ⅰ型式と軒平瓦Ⅰ-a・b 型式が出土比率が最も多く、中門、塔においては軒丸瓦Ⅱ型式と軒平瓦Ⅰ-a・b 型式が最も多いということである。つまり、出土比率で言えば軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式ともに軒平瓦Ⅰ-a 及びｂ型式と組み合っていたと理解せざるを得ないのである。ところが型式的には軒丸瓦Ⅱ型式はⅠ型式よりも新相であることは間違いない。その軒丸瓦Ⅱ型式と軒平瓦Ⅰ-a・b 型式が塔の創建瓦であるとすれば、金堂・講堂などよりも新相の瓦が使用されていることとなり、塔の建立がそれらの建物よりも若干遅れる可能性が指摘できる。あるいは軒丸瓦Ⅱ形式の年代観を若干さかのぼらせる必要があるのかもしれない。

先に基壇雨落溝に軒丸瓦が埋め込まれている状況を示したが（第９図）、この軒丸瓦がⅠ-b 型式であることも注意すべきであろう。塔の基壇築成時に、既に国分寺内で使用されていたⅠ-b 型式の瓦を流用して基壇築成時に雨落溝に埋め込んだと考えるべきであり、これも塔の建立が金堂などよりも遅れていることを示すのではなかろうか。この塔の基壇自体も金堂と同様の玉石敷の犬走・雨落溝を持つものの、外側犬走を欠いたり各辺が直角にならないなどいくつかの簡略化の状況を示している。

さらに塔は、瓦の出土状況が軒丸瓦Ⅰ型式よりもⅡ形式が卓越する点、基壇化粧に乱石積みを用いる点など、中門と共通する点を持っている。軒瓦の出土比率でも、中門・塔は共通する傾向をもっている。これらのことは、塔・中門がともに金堂・講堂よりも少し遅れて創建されたことを示す 焽7と思われる。

このように出土瓦の状況から堂塔の建立順序が推測できる例はいくつの国分寺でも知られている（註１）が、塔が先行する例は武蔵・上野・下野・下総などであり、遠近では金堂が先行する。美作国分寺は、金堂が先行して建立されたことが確認できる数少ない例の一つのようである。

（註１）森郁夫「国分寺初期の様相」「日本古代寺院造営の研究」法政大学出版局1998




第 16 図　塔跡基壇規模復元模式図

# 図　　版

美作国分寺跡周辺遠景
（南から）

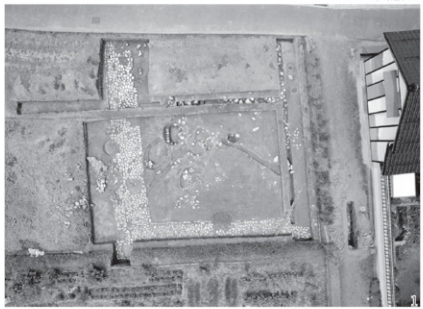
美作国分寺跡周辺遠景
（西から）

美作国分寺跡周辺遠景
（北西から）

美作国分寺跡周辺遠景
（北から）

美作国分寺跡周辺遠景
（真上から）

Ｔ 43 調査前



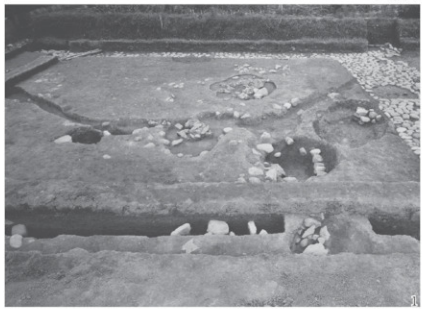
塔調査区全景

Ｔ 43 犬走り・雨落溝
（西から）

Ｔ 43 犬走り・雨落溝
（南から）

T 43 犬走り・雨落溝
（東から）

雨落溝南東隅



基　壇（西から

基　壇（南西から

基　壇（北から

基壇化粧（南東から

遺物出土状況

近世遺構